

平成十八年十月九日、体育の日、群馬県藤岡市の

菩提寺、光明寺で前橋市の天蚕弦製作委員会主催、

「上州天蚕弦復活」と銘打ち、薩摩琵琶の演奏会が

午後四時より開演されるという。私は知らなかった

が、琵琶胴は元々桑の樹で作られ、弦は天蚕弦であ

る由で、何と演奏の琵琶法師は、日本人にあらずア

イルランド人のトーマス蘭杖という外国人という。

天蚕（山繭）緑色した天然繭（弦とは、クヌギ、ナ

ラ、カシワ等の樹の葉を食べて育つ、山繭蛾という

野蚕から採れた糸を縫った特別な弦のことである。

嬢天下の上州は、日本初の富岡製糸工場の発祥の

地で、昔から養蚕業と係り深い。特に六百余年の光

明寺の中地区周辺は、昔から養蚕が盛んで住民は蚕

の飼育を正業とし繭を出荷し生計を立てた。国鉄の

八高線が開通時にも、蒸気機関車の吐き出す煙が桑

畑に悪影響あるとして、住民の反対運動が起こり、

結局桑畑を迂回した路線で決着した経緯すらある。

当日、光明寺で琵琶の演奏会開催と、寺に保存さ

れてきた「金色蚕姫」の巻物のご開帳が同時にある

と聞き、私は惹かれて家内と共に参加していた。

九月二十三日彼岸の墓参りの折、放生会（泥鰌を加

持して川に放流する）恒例行事に合せ、ご開帳と琵

琶の演奏会を実施すると住職がいう。私が物書きで

あることを知っている住職は、ご開帳前にも関わら

ず厨の奥で、黄ばんだ「金色蚕姫」の軸の絵図の特

別に見せてくれた。過日寺の十三塔再建のおり、小

倉から発見された絵図を、表具師に依頼して軸にし

たのだという。表具師の絵図中央の女神立像は、そ

の口に蚕を啜え右手に植物を、左手に珠を持つてお

り、左上に「北天竺舊中国霖夷大王姫」と更に「常

陸國鹿嶋郡農良浦谷神也」と表記されている。

資料があると住職が言つので、私はせがんで一部  
を入手。物書きの野次馬的好奇心が、「金色蚕姫」  
の逸話に注目させ、琵琶演奏にも興味を抱かせた。

『奇妙な受精卵』次作品の題材として、この故

事履歴を調査してみようとと思い立つたのである。

私の最初の疑問は、何故群馬藤岡市中の光明寺に

「金色蚕姫」の軸があるのだろうか？養蚕技術渡来

は、信州の安曇族という海人が、中国から水稻技術

と共に齎したと本で読んだことがあるからである。

次の疑問は、日本の養蚕技術の発祥地であった。

果たして信州安曇野や諏訪か、「金色蚕姫」の絵図

が残る上州の藤岡・富岡地方か、はたまた姫が舟で

漂着した常陸國豊浦湊（茨城県）界限なのか？

現に子供の頃、育った岡谷諏訪地方には桑畑がい

たる所にあり、片倉組の製糸工場が存在した記憶が

ある。繭を作る養蚕業や、繭から糸をとる製糸業、

も盛んだった。大規模な日本初の仏式機械を導入し

た官営富岡製糸工場を始として、小規模家内工業と

しての座繰りによる糸執りも、両地方の農家の貴重

な収入源であり、絹糸や絹織物は、中山道を運ばれ

て横濱の港から船で輸出されたと聴く。絹輸出業も

また当事の日本の基幹産業だったはずである。

過つての花形産業は、今中国絹糸に圧され斜陽産

業と化した。生糸の生産量で、往時最盛期の20分

の1、原料の繭生産も50分の1、養蚕農家数に至つ

ては200分の1以下にまで激減している。現在我

国の繭の生産量は、1900、余り、群馬県が第一

位、福島県、埼玉県の順である。繭の用途の大部分

は糸であり織物であるが、化粧品・食品、医療用縫

合材、和楽器の弦等の新用途も開発されている。斜

陽と言われた養蚕業だが、最近の先端的技術報告に、

蚕を使用した昆虫バイオ工場の研究構想がある。

住職から入手した資料に寄ると、茨城県に蚕神を

祀る二つの神社があることが記述されている。

一つは茨城県筑波郡筑波町の蚕影神社で、もう一

つは日立市北部川尻にある蚕養神社である。

私はふと、有楽町の蚕糸会館を思い出していた。

事実を確認したくなり係りの人に電話で趣旨を連

絡、13日そこを訪ねた。同館地下のフランス料理の

老舗、日本で一番とグルメの間で評判のアピシウス

に何度か行ったことがあるからである。そこでの工

ピソードがあるが脱線するので割愛する。恐らく

養蚕に関する史実の資料や本があるに違いないと考

えたからである。確かに書庫に無数の書物や文献が

収められていたが、どれを観たらよいか皆目見当

もつかない。幸い親切な女性の手引きで、「金色蚕

姫」の事を記した本と、「琴三弦用特殊絹糸産地を

訪ねて」（シルク情報'06.4）を見付けることができた。

《俗説》云、欽明天皇の御宇、天竺舊中国霖夷大

王の女子を金色女といふ。継母にくみてうつぼうぶ

ねにのせてながすに、日本常陸豊良湊につく、所

の漁人ひろひたすけしに、程なく姫病死して其靈

化して蚕となる。是日本にて蚕養の始めなり。

《公益俗説弁》（享保四年一七一九）より

△欽明天皇の御宇にはじめて蚕養ある。其由来を

くわしく尋ねるに、むかし北天竺宮の中に舊中国

と云國有。其國に王おはします。御名をば霖夷大

王と申奉り御后を光契夫人と申也。また御むすめ

ひとりまします御名をば金色皇后と申しき。

『庭訓往来抄』(寛永八年一六三二)の書き出しより

『庭訓往来抄』のみならず、古い『戒言』という

書物(永祿元年一五五八)にも同じ話が記述されてい

るのは興味深い。『戒言』から二百数十年後の江戸

時代『養蚕秘録』(享和三年一八〇三)でも、金色蚕

姫の物語を紹介し、姫の靈魂が化して蚕になったと述べているという。物語を要約すると以下である。

ある時、金色姫の后は、重い病気で亡くなる。王はやがて後妻の后を迎えるが、後妻の継母は金色姫をつとみ亡き者としてよつと奸計を企む。最初は獅子吼山とつと人の通わぬ深山に姫を捨てさせた。獅子は姫に危害を加えるどころか、姫の面倒をみて後に背中に乗せて宮殿に送り届ける。二番目に、遙か辺境の鷹群山に捨てて、家来が姫を見付けて連れ帰る。三番目は、彼方の海眼山とつと遠島に流すと言った按配。何れも戻ってくるので、四番目には、穴を掘って姫を埋めるが、百日後に地中から光が差し金色姫は救出される。王はこの國で憂き目を見るよりは、桑の木で作ったつば舟で姫を乗せて沖に流す。蒼波万里を凌いだつば舟は、何年も掛って常陸國の豊浦湊に漂着、浦人の權太夫に発見される。權太夫夫婦が姫の面倒をみるが病死する。ある晩夫婦は夢をみて、姫を納めた柩を開けてみると、姫の姿はなく小虫がいた。桑の葉を「えたと」虫どもは喜んでこれを食べ次第に成長した。但し途中四回(姫の受難の回数程休んで爾となつた。

この物語中、金色姫は衆生を救済する蚕養神として話が展開されている。姫をうつば舟に乗せ沖に押し出したときに王は姫に言つのである。「汝は生まれたる時より人にあらず、いか様仏神三変化の化身也と覚ゆ。此國に居て辛き目にあわんより、仏法流布の國に揺られて依つて衆生をも済度し給ふべし」と・・・。

つまり仏教の真言密教と結びついて、僧侶や神官の手で加持祈祷の形式で蚕神「金色姫」として祀られる。神仏習合の密教思想が、蚕影神社や蚕養神社の創建を齎しその縁起に、いずれも「これ日本養蚕の始め也」と記すこととなつたといつのである。

日立の蚕養神社から分祀の、群馬県勢多郡北橋村にも同名神社があるし、福島県会津若松市蚕養町にも蠶養國神社がある。京都市右京区太秦に木嶋坐天照御魂神社、通称「木嶋神社」又は「蚕の社」と呼ばれ、当神社本殿の東側には織物の祖神を祀る蚕養神社があり「蚕の社」も蚕にちなんだ社名である。社殿西に絶えず湧水の「元紬の池」中に、世にも珍しい三柱の三つ鳥居を持つ神社としても知られている。かように金色姫の逸話は、茨城県のみならず各地広範囲に伝えられていたよつである。

上垣守國著『養蚕秘録』は、上・中・下と三巻よりなる書物で、江戸時代の養蚕書の内最も出版部数の多いものであるといつ。本書以外にも類似の養蚕書が奥州、上州、信州で流布しており、著者はこうした書物が、巷間望まれていたことを知つていたと推測される。十八歳から養蚕技術を習得の著者は、後に但馬國(兵庫豊養父郡蔵垣村(大屋町字蔵垣)の庄屋を務めた。宅跡には碑が残されているといつ。

但馬國は、丹波・丹後兩地域と供に三丹地方と呼ばれ、日本海に面し荒地で放置されていた河岸段丘であつた。東國の生系に対抗し、京都の機織業を支えて、後に山の中腹までもが桑園化された一帯となつたよつである。上垣守國は、若い時から何度も東國(常陸・信濃・上州や奥州の岩代國の伊達郡や信夫郡)の本場に出掛け、技法を習得し蚕種を仕入れている。技法も隠さず公開し後に育てた蚕種を、三丹地方のみならず山陰・山陽地方にも販売している。

『養蚕秘録』著者が、文面から参考にしたと思われる書物が三冊あると推測されている。一つは久美濱代官野村権九郎正福が、寛政九年(一七九七)に発した「養蚕の儀に付御触書」、一つは三年前の丹後宮津表具師大和屋庄七板著の同名の小冊子、もう一つは、信州塩尻村の塚田与右衛門著「新撰養蚕秘書」(宝曆七年=一七五七)だといつ。唯この三書は、何故

か「養蚕秘録」巻末で引用されておらず、引用は、別の書物で何と二十五の和書であつたといつ。

BC五世紀、中国の江南地方から航海術に長けた海人が、東支那海を筏で渡り北九州へ至る。中国の養蚕発祥の地は、正に長江(揚子江)の南の江南地方であつたのだが、水稲技術の伝来が養蚕技術の伝来より早かつたとする見方が大勢である。金印が発見された北九州志賀島の志賀海神社に、綿津見神が祀られている。神社代々の宮司は阿曇姓である。海人が津見(定住)し、綿津見神が祀られている場所、志賀島が、阿曇族の根拠地であるといつ説がある。

信州の中心安曇野に著名な穂高神社がある。本宮に祀られている祭神は、中殿總言見神で左殿に志賀島と同様の綿津見神、右殿瓊瓊杵神である。阿曇・阿曇の語源は、海人津見が訛つた言葉で、津見は「住む」の意味である。海人の末裔、阿曇族が、何故日本海を北上し、如何なる経路を辿り陸に上がった信州に定着したのかは諸説あるので割愛する。

下関長府に忌宮神社(豊浦宮ともいつ)があり、西暦1955年に、渡来人が蚕種(蚕の卵)を献上したといつ「蚕種渡来之地」の碑が境内の一角にある。つまりシルクロード日本上陸の地といわれている。「日本書記」に蚕に関する起源神話が載つている。稚産靈日神の頭上に、蚕と桑が生じ腹から五穀が生じたと・・・。「古事記」には食物の神大氣津比売神は、鼻と口や尻から各種の美味な食物を取り出し、須佐之男命に差出したが、汚して出したと立腹し大氣津比売神は男命に殺される。その死体の頭から蚕が生じ、目に稲穂、耳に粟、鼻に小豆、陰部に麦、尻に大豆が生じたと・・・。藤岡の菩提寺、真言宗の光明寺に「金色蚕姫」の絵図が残されていた理由こそ、逸に養蚕業を営み蚕神を崇める昔の農民の信仰心と、養蚕業に従事した当事の女性の地位向上を物語っているに他ならない。

了